

後期日程

本2022

令和4年度入学試験問題(後期日程)

小論文

教育学部
学校教育課程
小中連携教育コース

— 解答上の注意事項 —

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子のほかに解答紙1枚と下書き用紙1枚がある。
- 3 解答は横書きとする。
- 4 解答紙を提出すること。
- 5 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ること。

【問】 下記の文章は、フランスにおいて、小学校の宿題を禁止することで、家庭での学習環境の不平等を改善する一つの試みを紹介しています。文章を読み、フランスの試みに対して「良いと思うところ」と「悪いと思うところ」も提示しながら、あなたの考えを800字以内で述べなさい。

私はフランス・パリに暮らしている。昨年9月に子供がフランスの小学校に入学した。入学直前には担任の先生による説明会が開催された。担任の先生は、一日の流れや読み書き、算数の教え方などの説明をした後、「ちなみに私は毎日『筆記の宿題』を出します」とどこか特別なことでも宣言するかのように言った。そして「ただし筆記の宿題は必須ではありません。やらなくても大丈夫です」と続けた。そう、驚くべきことに、フランスでは筆記の宿題が小学校に関しては法律で禁じられているのだ。いったいなぜフランスの法律は、筆記の宿題を禁止しているのだろうか。法律で禁止されるということはつまり、宿題が社会に対して何らかの形で悪影響を与えるという認識があるはずだ。歴史と現状を調べてみると、そこには意外な理由があった。

1912年、初めて宿題が禁止されたのはオート＝マルヌ県の学区だった。その理由は3つ。(1)子供の過労のリスクを回避するため、(2)学校外で勉強をする際の環境が一般的に悪いものであるため、(3)教師たちは宿題の添削よりも優先するべきことがあるため。その後も、実際には様々な理由をつけて筆記の宿題は出され続け、その度にそれを禁じる新たな通達が出されてきた。そして1994年には、学校での授業とは別に、一日のうち30分間、「自習指導」の時間が設けられることになる。これはつまり、その30分間については、先生が児童を個別指導できるようになったということである。この施策は、家庭環境の不平等から発生する「学びの遅れ」などに早めに対処することが目的だった。家庭環境など、児童自身が自ら選んだわけではない事情で選択肢が狭まってはならない、それに対して学校側ができることは宿題の禁止である…というわけだ。

フランス革命の理念は「自由・平等・友愛」だったが、その「平等」の理念が、現代においても教育制度として息づいているように見える。もっとも、フランスも理念のレベルでは平等を目指しているものの、実際に子育てをしていると様々な格差を個人レベルで感じる機会が多い。私の子供たちが通う小学校はいわゆる中流家庭の子供たちが大半の学校だ。しかし一方で、その学校にはあらゆる国籍の子供が通い、中には親が外国人でフランス語がおぼつかない子供たちもいる。バカンス時期になればバカンスに行ける子供と、毎日学童に通う子供もいる。

昨年11月にはPISA¹の結果が発表され、フランスはその教育における不平等が深刻であることが示された。経済状況などが恵まれない環境にいる子供のうち、「最低限の読解レベル」に達していない子供は、恵まれた環境にいる子供に比べて5倍も多いと指摘されたのだ。多様な文化や言語、地域格差など様々な要素があいまって、ある程度の教育を受けられる子とそうでない子の差がどんどんと広がってしまっているというのがフランスの現状なのだ。

〔出典〕大野舞「フランスでは「宿題」を出すことが禁じられている、その深すぎるワケ」『現代ビジネス』(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/70685>・2020年3月1日掲載)
※出題に際して、文章を一部抜粋し、再構成しています。

¹ OECD（経済協力開発機構）の学習到達度調査